音楽を手段としたキャリア教育の実践
――保育者の質向上のための一考察――

Career education practices using music as a Medium:
A study on improving the quality of childcare providers

大森　淳子
Junko Ohmori

はじめに

１．研究の背景

近年、子育て支援事業が急がれる中、保育士の処遇改善がなされるようになった。同時に「保育の質の向上」が求められているが、保育士（者）養成校（以下養成校）は一人でも多くの人材を輩出しなければならない状況であるにも関わらず、多様な学生たちの指導と対応に苦慮している実情にある。

現代社会での情報技術革新は著しく、私たちの日常生活も大きく変化している。社会環境の変化は、当然保育者を目指す学生たちの成育環境にも大きな影響をもたらしていることは例外ではない。身体的には大人でも、精神的な発達は伴わず、人間関係をうまく構築することができない、自分で意思決定ができない、自己肯定感を持てないといった学生が増えている。

筆者が授業を受け持つ養成校も例外ではない。ただし、学生たちは「保育者になる」「保育士資格を取得する」という目標を明確にもって入学してきているに違いない。保育という分野には温もりのある人間らしい感情や直感＝感性豊かな人材が求められる。感性を磨くためには、人の内面に働きかけることに直結する音楽の授業は重要である。音楽を手段として多様化している若者の内面をさらには表現力を育てることができるのではないだろうか。

現在、筆者が教鞭をとる養成校には音楽分野に関わる学習として、音楽理論やピアノ、歌唱、合唱などがある。ただ残念ながら多くの学生たちは、苦手意識を持って授業に臨んでいるように見受けられる。苦手なだけに何とか授業についていこうと必死になる様子の学生に対し、何か詰め込み教育をしているのではないかという感覚に襲われるのは筆者だけではないと思われる。弾き歌いにおいてはピアノの技術面で悪戦苦闘しているため、本来歌うことが好きな学生であっても小声で自信なさそうに歌うことしかりである。手あそび、読み聞かせ等においても、表現力に乏しいと言わざるを得ない。こどもたちの想像力、創造力を高め育てる保育者に必要とされる豊かな表現力を、

保育者を目指す学生に身に付けさせることができるかは、養成校で指導にあたる教員にとって重要な課題となっている。

２．研究の目的

筆者は保育者として巣立つ学生の表現力を育てる授業を構築したいと検討を重ねた。先に詰め込み教育という言葉を使ったが、表現力を磨くために一番直結するべく養成校の音楽表現の授業が、多くの学生が苦手意識を持つピアノやソルフェージュの授業をメインに構成され、読譜力を強化する等 、基礎技能に力を入れざるを得ない現実がある。また、音楽の素養をすでに身に付けた学生だけを保育者として育成するということも現実的ではない。そして、ピアノが弾けるからといって必ずしも表現力が豊かだとは限らない現状もある。

このようなことを踏まえ、「音楽を手段とした人間教育」を念頭に置いた授業を提案し、学生たちに音楽を愛する心情を育て、表現力豊かな“人づくり”を目指す教育、言い換えれば「音楽を手段としたキャリア教育」を実践することとした。

キャリア教育とは周知のとおり、今の時代を生きていくために、必要となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育である。育てたいのは、「コミュニケーション能力」「熱意・意欲」「行動力・実行力」等の社会的自立に向けた基礎的な能力である。そして、それらすべての能力の土台となるのが表現力であると筆者は考える。

文部科学省のキャリア教育の手引きには、「自立的に自分の未来を切り拓いて生きていくためには、変化を恐れず、変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である。そのためには、日常の教育活動を通して、学ぶ面白さや学びへの挑戦の意味を子どもたちに体得させることが大切である」[1)] と説明されている。「仲間と協力して学ぶことの楽しさを通して、未経験の体験に挑戦する勇気とその価値を体得することで、生涯にわたって学び続ける意欲を維持する基盤をつくる」[1)] ことを目標に、「音楽を手段としたキャリア教育」の授業、「表現」の構築を試みる。

養成校での「表現」の授業の実践について

学生一人ひとりの表現力を引き出すためには、どのように授業を構築していくことが望ましいか、学生の興味関心に留意しながら実技授業を行う中、先に挙げた音楽分野の授業のうち、学生が目を輝かして楽しそうに臨む授業が「合唱」であり、学年全体でのハーモニーを奏でることであることを認識した。「合唱」の授業で互いに協力して表現し合うことに目を輝かす学生たちに着目し、学生たちが協働しながら一つの作品を創り上げる過程を大切にした授業を実践することとする。一人が全体の一員であることを意識させ、基本的な生活習慣が問われる現代の若者である学生に、他者の存在の意義を認識させ、共同的・相互作用的な生活を送ることを期待する。また、若者に欠けているとされるコミュニケーション能力を養うことも合わせて期待するものである。さらにこどもたちの表現活動を豊かにする保育者の知識技術を体得することにも繋げていく。

１．対象と期間および方法

筆者が授業を受け持つ養成校の協力のもと、卒業年次生（３年課程３年次生）に「表現」の授業を位置づけた。３年生をグループに分け、グループ毎に創作ダンスや音楽の作品を創り上げることとした。そしてそれぞれのグループの作品を学年全員の前で発表し、学生同士で各々意見を出し合い、グループ毎の課題に取り組み、最終的には卒業音楽発表会というかたちで披露することとする。

ここで留意したいことは、グループワークで創作した作品を評価するものではないということである。学生はグループワークの過程において、何を学んでいるかを自ら考え、自己評価、相互評価を行う。教員はファシリテーターとしてグループワークを常に見守り、適宜アドバイスを行いながら授業への参加姿勢を、心情、意欲、態度面で評価することとする。

今回の研究対象は令和６年３月卒業の93名で、入学時のピアノの経験についてのアンケート調査では、75名が初心者（５歳ごろまでの多少の経験者を含む）であり、バイエル終了程度の学生が18名であった学年である。

前期実習時期を除く10週中、週12コマ（１コマ50分）の表現の時間中10コマを、後期、卒業発表会までの期間10週中、週12コマのうちの10コマをグループワークに割り当てる。残りの２コマは、教員が音楽的な指導をする時間とした。

２．グループ編成と具体的な取り組み内容

創作活動においては、表現分野の教員で話し合い、以下に述べる６つのグループを編成した。ただし、読譜に関して、グループ間で力に偏りが出ないように配慮をした。また、学生自身での話し合いによってグループを横断し、掛け持ちを可とした。和太鼓グループにおいては、20分間全力で打ち続けるという体力面、精神面を考慮し、男子学生のみとした。そして学生の話し合いでグループ毎にリーダーを決め、進捗状況をリーダーたち同士で報告し合うこととした。さらに学年全員で一つの表現を協働して創りあげることを目指し、93名全員で歌を伴う遊戯を行うこととした。

理論を学んでいても、読譜することすら一人では難しい学生がどのように問題を克服しながら作品を仕上げ、その過程において学生たちの内面にどのような変化が表れるかを期待し授業に臨んだ。

（１）グループと課題

１）和太鼓：和太鼓用のリズム譜をリーダーに渡し、イメージする表題を考え、打ち方等を学び、太鼓を通した身体的なパフォーマンスを考える。

２）創作ダンス：指定した曲での創作であること、テーマを考え、構成する。

３）ベルパフォーマンス（ミュージックベル）：低音部と高音部に分かれたピアノ連弾用の楽譜を使用し、限られた音域・音色の中で、楽曲を表現する。（一人１セット27音＋低音５音のベルを使用）

課題曲：「サウンドオブミュージック」より

４）マリンバアンサンブル：ピアノの連弾譜を使用。マリンバ２台、シロフォン、ビブラフォン、グロッケンで、パートを考え、楽曲を表現する。

課題曲：「動物の謝肉祭」より

5）ヴォーカルアンサンブル：ミュージカルの場面をつなぎながらセリフや歌唱で物語が流れるように工夫する。

課題曲：「リトルマーメイド」

6）小編成吹奏楽：楽器の経験者を含み、楽器の扱い方等からアンサンブルの初歩を学ぶ。

課題曲：「アルバマー序曲」他

7）運動遊戯：学年全員での歌を伴う遊戯を行う。リズムを感じ、全体の息遣いを感じ、空間を感じながら表現する。合唱しながら、ステージ上で身体表現を学年全員で行う。

課題曲：「カイト」（嵐）

（2）グループでの創作活動の実際

次に学生たちのグループ毎の取り組みの概要を以下に示す。（表1）

表1　表現授業グループ毎の取り組み

週	和太鼓 男子 11 名	創作ダンス 女子 31 名	ベルパフォーマンス 女子 7 名	マリンバアンサンブル 女子 8 名	ヴォーカルアンサンブル 女子 12 名 男子 2 名	小編成吹奏楽 女子 24 名	運動遊戯 男女 93 名
前期 1	オリエンテーション 4パートからなるリズム譜を一つのパートごとに全員で読み、声に出して合わせる 例）♩＝ドン ♪＝コ ♫＝ドコ	テーマ構成について考える（グループ全体と小グループとに分かれたダンス）	パートを決めるために、ベルの音域と使用する音の数、頻度を正の字を使って調べる	動物の謝肉祭について理解を深める。 イメージ作りをする	リトルマーメイドについての理解を深める 配役 譜読み	受け持ち楽器の決定 楽器の扱い方を学ぶ	歌　発声 （パート別の音取り、歌詞）をしっかりと暗譜する
2〜3	振り分けられたパートの個人練習およびパート練習	それぞれのダンスについてイメージの共有を行い、振り付け開始。 体幹を感じ、鍛える練習	①をもとに各々が受け持つ音、持ち替える音を決め、譜面にマーキングする	受け持ち楽器の決定とマレットの扱い方を練習 パート決め	譜読みと個人練習 発声等	ロングトーン・ 音階練習 譜読み開始	同上 美しい姿勢での歩行練習
4〜5	小節ごとに合わせていく（はじめ慎重に 1 小節ずつ確認していたためフレーズごとのリズムを意識するようアドバイスする練習番号を考えさせる）	振り付け（経験者を中心に） 曲のカウントを取りながら振りに結びつける 歩行の基礎練習等	譜読み開始拍子を打ちながら声を出して階名読みを重ねる サウンドオブミュージックの映画を視聴 書籍、DVD 等を見ながら、持ち方、打ち方を研究する	譜読み開始 個人練習 全員での練習 以下 曲ごとに繰り返し	譜読み 発声 重唱部の練習。（ピアノ担当の学生がメロディ部分を弾きながら音程、リズムをとっていく）	個人練習 パート練習	歌パート練習 人との距離、息遣いを感じながら美しい体系を作る練習 振り付け開始
	練習番号にしたがって合わ	練習の前後に柔軟体操やス	練習する速さを決め、メトロ		場面ごと、全体練習を重ね	個人練習	

6〜7	せる 速さが一定ではないことに気付き、メトロノームにしたがって手を打ち出すメンバーが現れる	トレッチを行う様子がみられる	ノームを使い自分の受け持ちの音を実際に鳴らしてみる	↓	る それぞれが自分のイメージと異なる表現に気付いたときは、意見を言い合う姿が多々見られるようになる	パート練習 全体練習	人との距離、息遣いを感じながら美しい体系を作る練習
8〜9	リズムや拍の速さが理解できない学生に対し、理解できている学生が張り付き、個人練習を繰り返す	個人別に経験者が張り付き練習する	テンポを上げると持ち替えが不可能である部分が見つかり、どのようにその音を鳴らすか、そして連携ができるかどうか思案する	↓	グループ全員で劇団のミュージカルを鑑賞　声の出し方、身振り、表情等、各々が学んだことを話し合い練習に活かそうとする	パート練習 全体練習	合唱をしながら動く練習 歌の表現、動きの表現への全体での取り組み ↓
10	全パートで合わせてみる リズムからイメージする表題を考える 衣装の検討 中間発表① 話し合い	→	曲の雰囲気に合わせたパフォーマンスを考えながら合わせる	演奏時の自分たちの表情やパフォーマンスの見直し	言葉の発し方について お互いに聞き合う	全体練習 主に曲想	
後期1〜3	前期課題の取り組み 統一感のある身体表現を考える	→	振り付けに伴う表情と年齢に合ったしなやかな動き、振り付けの調整　等	曲に合ったテンポ感 音色の研究	動物ごとの特性に合った音色の研究等	言葉とハーモニーの追求	音程、音量について、楽器の歌わせ方についての研究	表情を考え、個々ではなく全体としての表現を修正する
4〜6	総仕上げ練習 中間発表② 話し合い	→					
7〜8	全体合わせステージ上での配置、照明等を確認する	→					
9〜10	照明係 4 年生との打ち合わせ等 リハーサル 本番	→					

（前期 4 月〜7 月：実習期間を除く　後期 10 月〜12 月：12 月 22 日発表会）

3．結果及び考察

この授業の総括のために行ったアンケートによると、学生が一番難しいと感じたこととして挙げたのは、グループからはずれてしまう学生に対して、自分たちの力で「自覚を促す」ことであった。確かにグループリーダーが涙を流しながら、何度もそのような学生に働きかける姿がみられ、徐々に欠席は減少した。感心したのは、嫌々リーダーを任されたのではなく、積極的にリーダーを引き

受け、できるだけ教員の力を借りようとせず、リーダー同士の話し合いで問題解決を図ろうとする姿勢が見られたことである。リーダー格の学生の成長につながったことも事実である。

次に挙げたことは、自分たちのイメージしたことを皆で共通理解することが難しいということだった。台詞の言い回し一つでも、グループの中のメンバーにでさえ思いを伝えられず、どのように多くの人に自分の思いを伝えられるのかと、全体の課題にもしていた。学生たちは常に「自分」ではなく「全体」や「他者」を基準にして判断し行動していた。この音楽表現の授業だけにかかわらず、学校生活はもちろん社会で働くこととなっても、すべてがそうであるべきこと、またそのための自己の身体と精神の管理ができなくてはならないことを各々が自覚した。

注目したのは、学生は皆、技術、理論にも時間を費やして学んだことも事実であるのに対し、その練習についての苦労は述べていない。技術や理論でなく、それらを創りあげる過程でお互いに仲間を支えあうことの重要性を語っている。（図１）

さらに授業を終えて、学生が一番感じていることは、自分の役割を果たせたことへの達成感や支えてくれた人たちへの感謝の気持ちである。（図２）

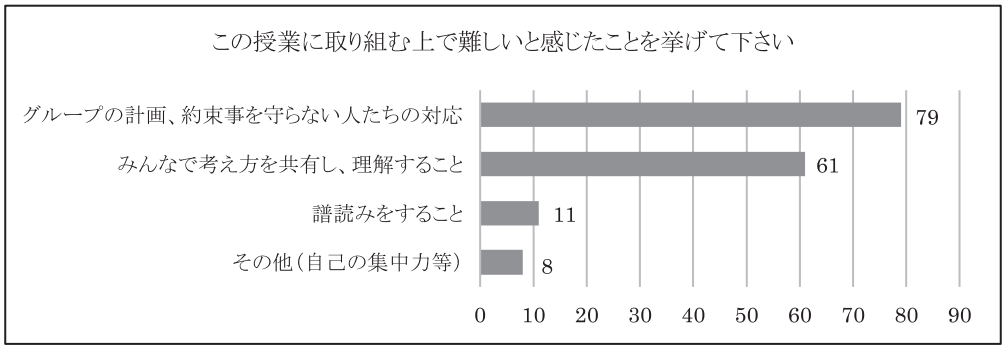

図１　学生アンケート①（回答者93名　複数回答）

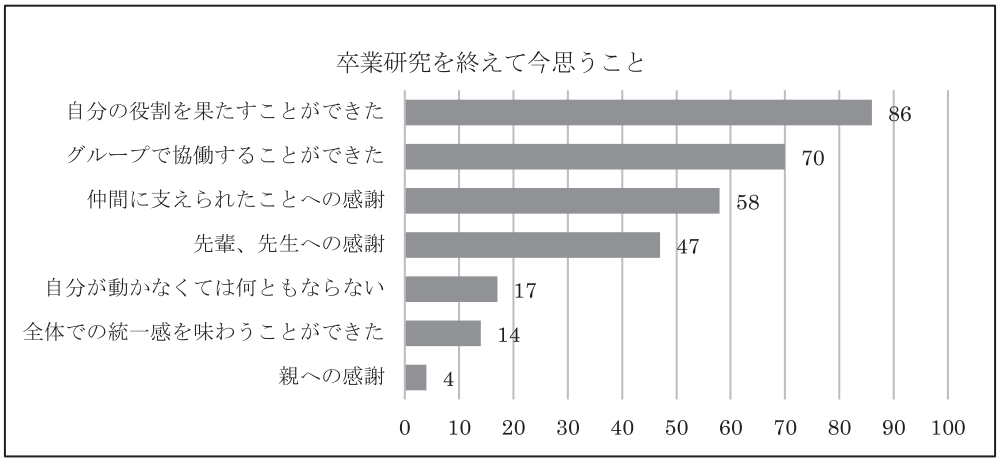

図２　学生アンケート②（回答者93名　複数回答）

仲間を磨くことによって自分が磨かれるということを学生自らが感じたのである。仲間とともに協力し、一つのことを成し遂げるという達成感とともに学生たちは各々が感動を味わった。それぞれが「こころ」を育て合い、自己理解につながっていると考察することができる。

養成校での教育の中で、学生と教師が人間関係を築くことが出来た時、学生は「せんせい」という仕事を理解し、さらに自らが「せんせい」と呼ばれるようになった時、こどもたちとその関係を作ろうという気持ちが自然に生まれてくれたら、「音楽を手段としたキャリア教育」は、人間関係を構築するためにも最良の教育といえるのではないだろうか。

「音楽を手段としたキャリア教育」の重要さの認識を新たにした今、学生が保育の本質である「保育するこころ」を理解、感受できるような授業の構築が必要であると強く感じた。

苦手な事を萎縮しながら学ぶことよりも、同じ音楽の、または表現の分野で得意なことを生き生きと学ぶことが、学生の感性を磨き、内面を成長させることにつながる。学生の技術よりも感性を磨くことのほうが保育者としての資質を上げることにつながるのではないだろうか。音楽の持つ、人の内面を引き出す力を理解できた学生は、質の高い保育を展開できるのではないかと期待する。

一方で、これらのグループワークの授業を行いながらも、学生は通常通りのピアノ課題の練習にも取り組んだ。試験には弾き歌いを課したが、ピアノ以外の音楽に触れたことで学生たちが仲間とともに教え合うなど、コミュニケーション力が高まり、ピアノの練習に積極的に取り組む姿が、見られるようになった。そして、生き生きとした声を伴う弾き歌いも休み時間や授業中、試験等を通して聞けるようになった。さらに出席率の低かった学生についても後期までには欠席が減り、基本的な生活習慣が改善されていると考えることができる。（図３）

些細なことに対してもグループ全体、クラス全体が皆で協力して向かう姿勢が表れたこと、すなわち学生のコミュニケーション能力、学生自身の表現能力が高められたことが授業や学生の学校生活の様子を通して、また総括アンケートから筆者が一番大きく感じた点である。

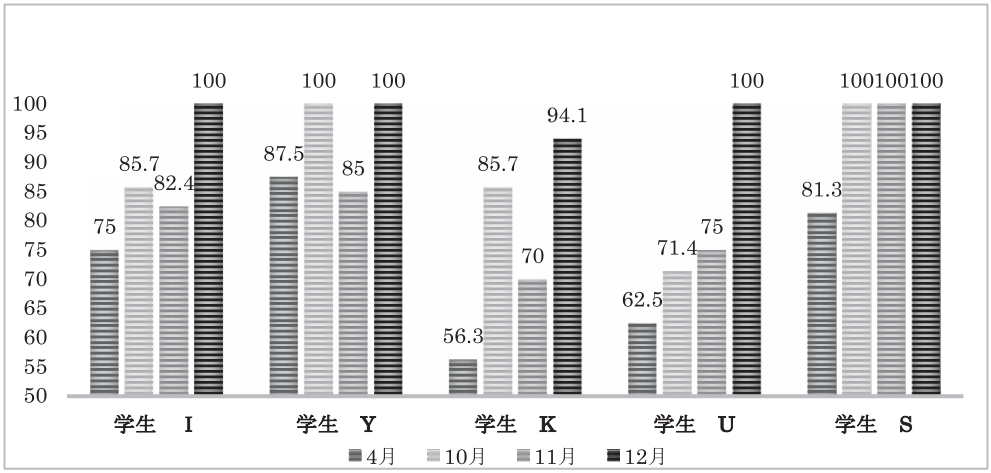

図３　３年次当初出席率の低かった学生の後期（12月まで）出席率

４．キャリア教育の「基礎的・汎用的能力」と音楽教育

学校を卒業した後、社会に羽ばたく学生たちのために、社会への円滑な移行のために、キャリア教育で育てたい能力の一つが「基礎的・汎用的能力」である。文科省のキャリア教育では「基礎的・汎用的能力」を構成する４つの能力を身に付けることを目標としている。そしてそれらは特定の活動や指導方法に限定されるものではなく、様々な教育活動を通して実践されることが望ましい。以下、それぞれの能力についての説明を「中学校・高等学校キャリア教育の手引き」から引用する。[2)]

①人間形成・社会形成能力

多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力

具体的要素例）他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等

②自己理解・自己管理能力

自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力

具体的要素例）自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等

③課題対応能力

仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力

具体的要素例）情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等

④キャリアプランニング能力

意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

具体的要素例）学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等

これらの能力は「それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため、特に順序があるものではなく、また、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けるものではない」[3)] と答申では説明されている。

図２で示した項目を上記①から④に照らし合わせ、学生の総括アンケートから向上したと思われ

る能力を整理してみる。

ア．自分の役割を果たすことができた　①②③④

イ．グループで協働することができた　①②③④

ウ．支えてくれた方への感謝　①②

エ．自分が動かなくては何ともならない　①②③④

オ．全体での統一感を味わうことができた①④

今回の音楽を手段とした授業を通して、学生は、「基礎的・汎用的能力」の４つ全ての能力において自らを向上させたことが明らかではないかと考える。

おわりに

養成校の学生もまた、現代の教育に翻弄されていると考えざるを得ないのであろう。表現力の乏しい＝コミュニケーションの苦手な若者を生んだ社会の背景には、「心の教育」がおざなりになってきた現状を否定することはできない。現代の若者＝学生に求めたいのは、心の豊かさである。心豊かで感性が磨かれていれば、表現力も豊かに育つということはこれからの時代も同じである。

保育者を目指す学生は、少なからず目標をしっかりと持ち、こどもを理解できるよう前向きに努力すべく入学してくる。だからこそ、学生の意欲をさらに高めていくために養成校の音楽の授業は構築されるべきである。こどもの内的な表現を引き出すのは、保育者のこどもを愛する心情である。「学生の内面のもの＝感性をどれだけ磨けるか」を課題としていた筆者は、筆者自らの学生に対する愛情、自らの感性、音楽性が問われているということを改めて強く感じるとともに、資格の取得だけでなく、社会で生きていく力も育成していかなければならない養成校としての重責を感じざるを得ない。

この授業を通してキャリア教育＝人間教育における音楽の力を強く感じることができた。音楽の素晴らしさ、音楽のもつ力を学生たちに伝え続けられるよう、音楽と人間形成について、音楽教育と心の教育について、今後も研究課題としていきたい。

引用文献

１）文部科学省.（2011）. *高等学校キャリア教育の手引き*（p.9）. 教育出版株式会社.

２）文部科学省.（2023）. *中学校・高等学校キャリア教育の手引き*（pp.21-22）. 株式会社実業之日本社.

３）中央教育審議会.（2011）. *今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）*（p.25）. 株式会社ぎょうせい.

参考文献

一般社団法人保育教諭養成課程研究会.（2017）. *平成28年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究：幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える*. 文部科学省.